

『親鸞聖人御一代記』にみる親鸞像

新 保 哲

一般に、この世の偉人に関する伝記物語は、幾つかの例外を除き、大部分は彼らの誕生の日から幼少時の在り様が凡人の常識を遙かに超えたものである。つまりその言動、著作、立ち居振る舞いのことごとくが人並ではない。

しかし、これは伝記的読物に限ったことではない。聞き語りの伝承においても、また節談説教においては尚更のこと強調されるところである。偉人・聖人と呼ばれる得る人たちは、後世の人々に有益多大な影響を与えた業績に依る。もともと、人類の物質文化又は精神文化において顕著な文化的遺産を遺したその偉業に対し、並々ならぬ尊敬・称賛の気持で誉め語られるのである。したがってその人物の示寂後、年代が次第に隔たるに相応して、史実から離れていき、虚像があたかも事実であった如くに創作され、時には事実無根、さらには全く相反することが記述される場合も起きる。そういう事も考慮に入れて本稿では考察してみたい。

そこで、ここでは日本思想史上に限定し、中世鎌倉時代の

浄土真宗の宗祖親鸞という人物伝について、彼が聖人と呼ばれるに相応しいその生い立ちから眺めていくことにする。そのためには幼少時期の成長過程を綴った『御伝鈔』（室町時代）、『親鸞聖人御一代記』（江戸中期時代）を主なる資料とする。そこには神話的・伝説伝記的に、人目を驚かす幾多の不思議な事柄が著されている。しかも一般的事実の描写記述ではなく、装飾に装飾を重ね、常識的感覚をはるかに越えて、人為的に権威付けのための創作が加えられた一巻の物語文学に構築されている。

『御伝鈔』（『本願寺聖人親鸞伝絵』上）には、親鸞の出生について次のように叙述している。

「夫、聖人の俗姓は藤原氏、天児屋根尊二十一世の苗裔、大織冠の玄孫、近衛大将右大臣従一位内膳公、六代の後胤、弼宰相有国卿五代の孫、皇太后宮大進有範の子也。しかあれば朝廷に任て霜雪をも戴き、射山に移て榮花をも発くべかりし人なれども、興法の因うちに萌し、利生の縁はかに催しによりて、九歳の春比、阿

『親鸞聖人御一代記』にみる親鸞像（新保）

伯従三位範綱卿、前大僧正の貴坊へ相具したてまつりて、鬢髪を剃除したまひき。範宴少納言公と号す。自爾以来、しばしば南岳天台の玄風をとぶらひて、ひろく三観仏乘の理を達し、とこしなへに楞嚴横河の余流をたたへて、ふかく四教円融の義に明なり。」

上記した『御伝鈔』の中には、親鸞の幼少時のこれ以上の細かい事柄は記述されていない。本書には、親鸞の家系や出家得度、そして吉水における法然との出会いの行実、さらに親鸞が源空の正意を嫡伝した証拠の記述を挙げ、配流、東国教化、帰洛後の晩年の生活に筆が移り、入寂の様子そして廟堂建立にまで至る経緯を事細かく記述している。こうした話の内容が、一体何を証拠にして纏められたかが問題となる。

恐らく、大筋は覚如が東国門徒の間で語り伝えられたところを、巡廻の折に聴き憶え、それを寄せ集めて、宗祖親鸞の念仏求法の足跡行状を再確認の意図を以って構成したものであろう。たしかに読んでみて、宗祖親鸞の在りし日の事跡の面影を偲ぶに足る十分に練り上げた文章である。爾来、江戸の正徳元年（一七一）を境に、親鸞聖人四百年五十回忌にあたり、急激に親鸞ブームの隆盛時代を迎える迄、親鸞伝の権威として尊重されたのである。

以上の諸点から『御伝鈔』と照合すると、親鸞のはなやかな叙述は、誕生時と打って変わって事実は全く逆であったこととなる。そこに親鸞聖典に編入された『御伝鈔』や外典の

類と成る『親鸞聖人御一代記』に著されたものが、如何に装飾を施し、権威付けの為の神話的叙述表現や伝説化して創作を意図的に試みているかが分かる。それが最も顕著に現わされたものとして、正徳五年（一七一五）に高田山の良空によって『正統伝』（『高田正統伝』、『親鸞聖人正統伝』とも呼ぶ）が出たことは注目に値する。

この良空の『正統伝』は編年体で編集されているところに特徴がある。そしてこの「編年体」には、親鸞の誕生から九十歳の入寂に至るまで、一年でも執筆が欠けた箇所はない。それぞれの幼年期、青年期、壮年期、熟年期、晩年期の年代順に依って、多い所で単行本の頁数にして十二頁にも互って行実が鮮細に書き紀されていると思えば、少ない所では最も簡短な文章で、四・五行で足りているという具合である。余りにも判っきりと逐一出来事が事細かに年代順に著されている。その中にはかなりの伝説上の物語を取り入れていたため、かえって史実ではないという疑いが持たれる作品である。そういう意味では、本稿での中心課題の『親鸞聖人御一代記』の方が、それに比べまだまだまともであり、靈驗談や奇跡談がより幾らか少ない位であるように思える。ただ上記の談義僧や講談師によって、仏教の教説をおもしろくおかしく、時には劇的に独特の口調で節談説教するために書かれた談義本である点が最大に異なる。それに反して『正統伝』は、読

み物としての楽しみ、または大衆文学教養のために書かれたものである。

ここで最も入手し易く、かつ読まれている『通親鸞聖人御一代記』の文章を、現代語調になつたものを引挙してみよう。

「そもく、わが親鸞聖人の父君は皇太后宮の大進藤原有範卿で、母君は吉光女と申して源義信の息女ちやと申し伝へて居ります、そして、高倉天皇の承安三年四月一日に洛外日野の里で御誕生なされたのであります。

松若様が御年四歳にられました安元二年五月十八日に父君有範卿は仮りのいたつきが元となりて薨去し玉ひ、又御年八つのお治承四年五月二十一日には母君も俄にお亡くなされ、あはれ此の全く頼りなき孤独の御身となられたわが聖人は染々と浮世のあぢきなきが身に泌み込み、覩じ来れば人生悉く風前の灯火でありませ、……若くして両親に死別すると云ふことは人生としての最大不幸であります、聖人は既はこの不幸にお出遇ひであります、……」

談義本として、ここで特に強調すべき点は、第一に親鸞の出生の家門の良さである。第二に、そうした著れ高い貴族の一門として誕生したにもかかわらず、不運に親鸞弱年の砌りの四歳に父と死別し、つづいて八歳の年に母とも死別したということである。親鸞が人生の無常を覩じたとすれば、この

『親鸞聖人御一代記』にみる親鸞像（新 保）

ことが最大の原因であろう。

第三には、それをもって子供心の九歳の時に、春伯父範綱に請うて仏門に入った。その間の決断の様子は、『通親鸞聖人御一代記』において情感に強烈に訴える文学的叙述で語られている。引文は略すが、第一章の一段目は、出家得度の動機が「父母の菩提を弔ひ」と「わが身の出離解脱の爲め」の二点に絞られている。節談義本の語りの順序としては、いきなり肩苦しい教学の根本思想である「一切衆生の救済」を唱導するよりも、誰れにでも分かり易い御先祖への供養とか儒教思想にみられる孝養の話を含ませて語り説く方が、どれ程大衆の心の奥深くに訴え身近な説教として理解できるか知れない。

次の二段目は、世俗的通俗的仏教の知識から、もう一段仏教思想を高めた「出家の功德は広大なものと承りて居ります」という具合に、順序を経て仏教の念仏世界へと敷衍化して説き進めている所に、説教師の功夫特色が窺える。そして覚如上人の『御伝鈔』によると、親鸞の出家の動機は、聖人もまた父の後を継げばそのまま天皇や上皇に仕えて出世出来る身であったが（射山に移て榮花をも発くべかりし人なれども）、との前置きを述べてから、「興法の因うちに萌し、利生の縁ほかに催しによりて」ということである。碎いた言い廻しをすれば、念仏を盛んにして、それによって民衆の迷いの

救いを果たしたいという切なる願いに抱かれたことの告白を意味している。

振り返って想いみれば、親鸞九歳の砌、慈円和尚の御前で「流転三界中 恩愛不能断 棄恩入無為 真实報恩謝」を唱えて、得度の儀式を行なつてから、幾多の難行苦行を経ていくのである。^{俗通}『親鸞聖人御一代記』には、『御伝鈔』の原文を基の資料として、さらに語り部の都合のよい解釈で、幾多の文学的装飾が加筆されている。加えて節談説教に特徴的なのは、根拠のないことを、あたかも事実であるかの如く説教者自らの私見潤色が加わり、荒唐無稽な説話の列記が行なわれていることである。そこでは如何にも親鸞がそのように学問したかと思われる程それらしく著されているので、参考のため引挙してみたい。

「されば聖人は十歳の時から天台四教儀、小止観、三大部などを学習し玉ひ、十一歳の御時には南家の儒者、日野民部大輔について外典を学ばせられ、十二、十三、十四の三ヶ年は竹林房淨嚴、毘沙門堂明禪などから但舎、唯識など学ばせられ、十五歳の三月には叡山で師の坊慈鎮和尚から秘密灌頂を御伝授あらせられ、十六、十七、十八の三ヶ年は仁和寺の慶雅の高弟に随ふて華嚴を開かせられるなど御登山以来すばらしい御勉強であります。」

以上の話は創作が大半だが、それに続く一節で「而し片時

もお忘れにならぬのは生死の大問題であります」と強調している点で、談義節の説教師は、間違いなく親鸞の念仏思想の根本問題がどこにあったかの核心点を見事に捉えている。すなわち生死出ずべき救いの道にぶつかり、真剣になって、その解決安心を求めたのが、あの師法然聖人との邂逅であったことを想起すれば、^{俗通}『親鸞聖人御一代記』は重要な箇所は見落していないことに気づく。

たしかに本文に記されてある通り、親鸞は「生死の大疑問」を解決せんとして、ある時には神明に、またある時には仏・菩薩に希願したのである。親鸞著述の中には、「三諦一諦の妙理をうかがい」「瑜伽瑜祇の観念をこらし」という具體的な宗教的修業行為は見当たらない。しかし、堂僧であった頃、それに近い修業は幾度か迷いの試行錯誤の上で試みたであろうことは想像できる。談義者がこの部分なりに仏教用語の内容を理解しないままに、如何にもそれらしく引用したといえる。

そして遂に彼は根本中堂の薬師如来にすがり、山王七社にも日夜足を運んだ。さらに京都六角堂の観音にも百日の祈願をしている。そういう意味において、親鸞の求道者としての生涯物語は余りにも人間的臭いが強過ぎ、かつまた人生の節目／＼の劇的場面も多く、したがって大衆的感情・情緒に強く訴える。いわゆる落涙なくして語れない要素が十分に窺え

る。正に、祖師伝の典形的模範となるべき宗教者の理想像を
持ち合わせており、伝記・劇中人物として中心的役割に適う
魅力的人物の生涯だといえよう。

さて、節談法談の語り句調には、口唱の為に読んでみるも
ので、終始一貫して基調リズムが取られていて、それなりに
抑揚の上げ下げが功夫されている。言う迄もなく、泣き落し
の場面は聞法者の感情に強く訴え共感を呼び起こすように、
ある種の劇的語りで描写叙述されている。しかも、具象的な
イメージで連想でき易い形式となつて、文章全体の台本が構
成されている。そして極めて平易簡潔な文章体である。した
がつて主人公親鸞聖人の心の緊張が、あたかも映像画像で追
うように高まり進行していく情景・様子が推察できる。知・
情・意でいえば、念仏一筋に掛ける宗教的求道の激しい情熱
が第一に聞法者に迫つて語りかけてくるのである。

また、文章の中に、親鸞聖典所収の『御伝鈔』『口伝鈔』
『教行信証』『改邪鈔』『愚禿抄』（上下二巻）『無量寿経』『報
恩講式』、また『古徳伝』『恵信尼文書』（大正十二年以後）や、
親鸞の越後での七不思議の伝説も随所に折り混ぜ、さらに玉
日宮の神話伝説も加え、そして関東下妻での弁円の入信の劇
的な回心物語、親鸞の箱根越えの話、等々が数多く添入さ
れ、『通親鸞聖人御一代記』、『俗親鸞聖人御一代記』一七一九年版、
一七七二年版）を一般大衆が聴いて面白い話しに作り上げてい

る。また同時に、娯楽はもとより、念仏思想による人間とし
ての生き方、宗教的情練教育、幅広い意味の教育的教養的修
身の効用も期待されている。

親鸞の物語構成には、寄せ集めた話題の資料が豊富にあ
るため、伝記叙述にはこと欠かない。勿論、談義本の台本は
この『親鸞聖人御一代記』を元にして、多少講談師の自己解
釈や功夫で談義調で語りつぐわけであるが、夜半に灯心の明
りの下で哀調を帯びて切々と、時にはたたみ掛けて説法する
口調には、いつの間にか此の世の苦しみを癒する特効薬とな
っていたことだろう。そして短歌を話の途中や結末の随所に
引用している所などは、大衆には一層親しみ易く聴き易い伝
記物にしたことであろう。

△キーワード▽ 文学的装飾、節談説教、宗教的情練教育

（昭和六十二年度文部省科学研究費補助金一般研究による研究成
果の一部）

（都立農産高校講師）